

Title	野上彌生子『迷路』論の前提
Sub Title	A precondition for discussing Nogami Yaeko's "Meiro"
Author	小平, 麻衣子(Odaira, Maiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.113, No.1 (2017. 12) ,p.203- 218
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	田坂憲二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01130001-0203">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01130001-0203</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 野上彌生子『迷路』論の前提

小平 麻衣子

はじめに

野上彌生子の長編『迷路』は、戦前に発表した「黒い行列」（『中央公論』一九三六年一月）、「迷路」（同一九三七年七月）を、戦後の一九四八年、第一部・第二部として改稿出版し（岩波書店）、続きは一九四九年一月から岩波書店の『世界』に掲載を再開した。掲載の終了は一九五六年一〇月である。作中の時間は、一九三五年から、第二次世界大戦で東京への空襲が現実味を帯びる頃までである。

連載当時の主要な総合雑誌は、戦後の国際関係を探る一環として、中国に関する記事を多く載せていたのは当然だが<sup>3</sup>、『迷路』掲載誌の『世界』では、講和に向けて、代表的な平和問題懇話会の「三たび平和について」（一九五一年十二月）など、単独講和の拒否を掲げる論調が当初の主流であり、サンフランシスコ講和条約で日本が西側寄りの立場を選択した後<sup>4</sup>も、欧米諸国の植民地支配から独立したアジア・アフリカ諸国によって、一九五五年にアジア・アフリカ会議が開催される前後には、中国だけでなく、それらの地域に関する多くの記事が掲載されることになる。これらの動きが、文学領域で一九

五二年から一九五三年にかけて起こった国民文学論争とかかわっていることは言うまでもない。

国民文学論争では、特に中国文学者・竹内好の発言は大きな影響力を持ち、民族の独立を重視する立場から、欧米追隨の「近代主義」が批判された。もちろん民族と言っても、当時は日本共産党の「五〇年問題」での分裂の中で、左翼側にこそ「民族」や「愛国」がスローガンとされていたという事情があり、竹内の主張する「民族」は、戦時中の軍国主義的民族主義だけでなく、こうした政治主導のあり方とも一線を画さなければならず、隘路を行くものであった。だからこそ、文学という領域が主要な舞台になり、また文壇の解体や、庶民の発見というさまざま問題と絡んでいることについては、近年多くの研究がある。

『迷路』において、主役の菅野省三は、政治家や豪商などのブルジョワと縁のある家の出身であるにもかかわらず、学生時代に左翼活動を行い、転向した。日中戦争で招集され、軍隊で中国人への理不尽な処遇を目の当たりにして懊悩する中、中国の状況に関する情報を得て、中国共産党と結んで反戦活動を行っていた日本人解放同盟への合流を目指して、延安に向けて脱走し、銃殺される。左翼活動が、物語の中の省三の行為としては中断されたものでありながら、戦後に上記のように再燃したところに、『迷路』の方向性は定まっている。

しかしながら、作品が長大なせいも、彌生子が教養派であるせいも、作中の知識や事柄の受容経路を調査した一部を除いては、先行研究はあまり多くはない。本稿では、まずは『迷路』全体の構成を確認する。ほとんどが基礎的な指摘となるが、『迷路』の内容のほぼ半分が、研究においては見過ごされてきたことを確認したいからである。後半では、そうした状況の先蹤としての同時代的な文脈について述べる。研究の前提を改めて確認するところまでしか至れないが、今後の『迷路』論構築のための足掛かりとしたい。

## 一・〈血〉における愛と暴力

左翼的な立場の論者から、野上彌生子が〈同伴者〉であるだけの不十分さとして、無視されてきたテーマやプロットは、

多く女性登場人物の活躍と重なっている。『迷路』は、当然だが、半分は女性たちの物語なのである。戦争状況における民族と国家の問題は、省三や木津などの男性たちを通じて主に考えられるが、その民族を象徴する「血」は、一方では性欲を暗示するキータムとして表れており、そのことよって、多津枝や万里子たち女性の愛の問題と連結されている。そして、それらを世代の反復、すなわち歴史の問題として統合するのが能のイメージである、という見通しに立って、『迷路』の大きな構図をおさえない。

まず、「血」のテーマを具体的にみる。「血」は、一つには、民族の違いを戦いに駆り立てる奔騰である。「血なまぐさい流れがだんだん北支に移りかけたのを、また二月に内地で迸った血はその支脈に過ぎないのを」（『青い夢』）、「からだちゅうの血が沸騰してまつ暗になるびんた」（『振子』）というような暴力の比喩が多いのは、戦時中を描くだけにありふれているが、それらは措くとしても、省三の決断に関わる重要な場面がある。省三は飼料を徴発に行った帰りに、表れたゲリラと撃ち合いになり、手榴弾で一人を殺してしまう（『飼料徴発隊』）。中国人の財産を奪うことに積極的に加担しない良心を發揮していたほどの省三が、本式の戦闘でもなく、制止命令が出されたにもかかわらずの興奮は、「あの調子でふいに沸りたつ血」（『振子』）のせいとされ、民族を敵味方に分けるものとして、後々まで振り返られる。

もう一つは、性欲である。省三は、一時期家政所に勤めた阿藤子爵家の妻・三保子からの誘いによってはじめて性的な関係を持ち、その後の誘惑にくり返し屈服する自らにいらだつことになる。「上昇する陶酔のあまさ、悩ましさ、焦だたしさで凝結してゐた若い血が、恐怖で却つて粗く奔流した」というように描かれる（『故郷』）。

こうした「血」をめぐる二つのテーマの接点を作るのが、省三と結婚する万里子である。両親を早く失い、叔父夫婦に引き取られている万里子は、渡米した父親がイギリス人女性と結婚して生まれた「混血」である。したがって、周囲の間から、あるいは語り手から、「血」についてもつとも注意を払われるのも、彼女である。自分の意見を通す強さは「血から来てゐるもの」（『小さい顔』）、仕事につきたいという、この階級では異端な意志は「毛細管の異質的な血のせい」（『万里子』）、時節柄縁談の不利になるであろう「万里子の純粋でない血」（『愛』）、省三の入隊に際して人目をばばからず示し

た拒絶の意は「血は争はれない」（「赤紙の日」というように、執拗である。ただし、万里子の性質や振る舞いが、異質な「血」だけに理由づけされるのであれば、状況によっては、それゆえの日本人の「血」との敵対を容易に招くはずである。

別に、彼女自身の象徴として加えられているのは、早く亡くなった父母との思い出につながるカリフォルニアの金門湾の青い海と（「小さい顔」）、光線の加減によって青くも見えることが何回も書き込まれる目の青色である。読者が、この青色を聖母マリアと結びつけざるを得なくなるのは、まだ何事も起こらない先に「どこか「受胎告知」のマリアめいたところがあつた」（「万里子」と予告されたさらに後、物語も進んだ「塔のある丘」での万里子から戦地に送られた手紙によってである。「はい」と「いいえ」以外、殆ど余計なことをしゃべらず、語り手もそれを尊重して、読者にとっては内面が不明であつた万里子だが、この手紙での独自の思考は、物語をも動かす起爆剤として機能する。

手紙では、お腹の子どもと共に省三の帰りを待つ気持ちから、「私と同じやうな女のひとが中国にも、ロシアにも、ヨーロッパにも、アメリカにも至るところにあなざる」ことに心を痛め、「世界ぢゆうの赤ちやんとお母さんのために」祈るとある。その対象は、かつて通ったカトリックの女学校でなじみのあつた聖母マリアである。だが、万里子がそれを「神様」と呼ぶことが端的に表すように、あるいは別の個所で、慎吾の友人でキリスト教信者である佐野について、与えられた運命に誠実で、日本軍の兵士としての任務に邁進する思考がさしはさまれているように（「慎吾のノート」）、万里子の信仰は、名前こそ聖母マリアを借りているが、キリスト教のどの教義とも離れた独自のものである。

亡くなった母親が小学校の教師をしていたことから、労働をさげすまず、叔父夫妻のもとで、富裕と幸福との乖離を彼女なりに味わってきた万里子は、省三と結婚して以降、「郷里の墓の山から見おろしたまるい入江と、幼い思ひいでに残る青い、光るものへの融合」（「愛」）を求め、省三にとつても郷里である大分県の「由木」（臼杵をモデルとした架空の地）で簡素な生活を営んでいる。後にふたたび触れるが、「由木」には大友宗麟の時代に、伴天連が行き交い、ラテン語の学問が発達し、「新しい信仰、文化に、飽くまで敬虔で、且つ潑刺とした受け入れ態勢」があつたとするのは、万里子ではなく省三で、まさに彼の青い夢であろう（「青い夢」）。だから、万里子の作中での役割は、特に省三との結びつきを経て、政治

的・文化的に対立する東西や、階級の上下を結ぶヒューマニズム——そしてそれは殆ど愛である——の体现である。

## 二、〈恐ろしく単純な思考〉の価値

そもそも、男女の愛情と、性欲、そして子どもを産むことが結びつくのは、多くの女性登場人物の中でも、万里子しかない。主要な女性人物は、省三の幼馴染で、東條内閣で入閣する政治家の娘・多津枝、木津のハウスキーパーで彼を愛すせつ、省三が一時家政所に勤めた阿藤家の妻・三保子、などだが、男性の登場人物たちが戦争に加担する前に次々に死んでいくのと同じように、性と愛の不一致を抱えて死に赴く。

せつは、彼女の愛と、運動への真摯な期待を重荷とする木津との擦れ違いの中で、確実な何かを妊娠に期待しているが、事故による流産のあげく、木津と別れ、運動のために命を落とすことになる。彼女とは階級の飛び離れた三保子は、子どもはいるものの、政略結婚で持て余す飢餓感を、若い男との隠れ遊びで追い求める。だがその求めるものは、徹底した肉体の満足であり、愛を知らない。

多津枝は、自分たちの階級に対する皮肉なまなざしを持ち、物質的な豊かさ抜きに幸福を信じないのだと居直っているつもりでも、その実もつとも愛を求めていることが、スタンダール「赤と黒」をめぐるサロンでの会話から窺える（「軽井沢」）。その聡明さだけでなく肉体の魅力で、挑みがいのある妻として、夫の興味を引き続けることに成功しているが、肉体の合致を愛と錯覚しようとする瞬間に、夫が子どもできない身体であることを知ることになる。それは、家に従属する母の役割を自らの意志で拒否してきたのとは異なり、夫にはいくらでも取り替えられる若い愛人たちの前に、将来にわたる肉体の価値について、夫を余裕ある優位に位置づけ、屈辱を招くものであったろう。

その後、些細な失言から特高に目をつけられ、夫と共に上海に飛ぶ飛行機の墜落によって死んでしまう彼女には、死の間際に互いの愛を確信しえたというせめてものはなむけが与えられるが、最後のセリフをみれば、それとても、気休めに過ぎない疑いを拭い去れるものではない。その点は、別荘の壁にかかる「チマブエかジョット」の聖母子像の複製に対し、彼女

が「聖母像のクリストつて、みんなこれだから嫌ひだ」（裸婦）」とつぶやくのが、強がりだとしても、万里子とうらはらな、物語中での彼女の位置を示すだろう。

そうした中におくと、万里子への省三の思いは、「もちろん、それが若い血を波打たせなかつたとはいへない」（愛）と性欲を含んでいるが、三保子について「むきだしの執拗な淫らさは、そのかみの娼婦の血がさせる振舞かとも感じられる」（故郷）のとは対照的であり、（健康な）性欲としての血が、愛を経て、子どもという血脈に流れこみ、時間をつないでいくと言える。

さて、いずれ『迷路』同時代の言説と接続するためにも、次に省三における血と主義との関係を確かめるべく、もう一度さきほどの万里子の手紙に戻りたい。万里子の「混血」に象徴される考え方が、省三の国家との関係性にも変化を与えるからである。手紙では続いて、省三や木津ら、学生時代に左翼運動にかかわった男性たちが「貧乏で困つてゐるものが貧乏でなくなり、お金があつて威張つてゐるものが、威張れなくなり、誰もが正しいところで、同じやうにしあはせに暮らされる世の中にしたいと考えた」ことに同情を示し、キリスト教とマルクス主義が相いれないことを知りながらも、「みなさんは神様が望まれることを、人間の手ではじめたので、つまりは、同じことをしてゐなさるのだ」という独自の解釈を示す。

これに対し、「おそろしく自己流で、プリミチヴで、童話的」と批評し（張先生）、内容が検閲に触れることを恐れている省三も、隊の中国人コック・陳平喜のスパイ容疑での処刑を目前に、「現在の事情におかれて、省三が脱走しようともせず、陳を助けださうともしなかつたら、万里子はきつと失望するであらう」（脱走）と選択のよりどころとしていく。省三が「民族的憤怒と抵抗」を感じるのは、飼料徴発に行つた際に、目の見えない老婆が若い家族の女性を身を投げ出して守ろうとする姿にある。省三自身も、その帰りの中国人ゲリラ殺害は、脱走と、終戦を画策するゲリラへの合流に踏み切れないひつかかりの一つとして、何回となく思い返すことになる。「あの調子でふいに沸りたつ血に対して、イデオロギーや、共通の目的意識による安全弁が、必ずしも役だつたか。省三の疑ひはその怖れにほかならない。それにしても、突然理性をこえて抵抗しがたく掴むあの暴力はいつたい何か。民族精神、もしくは祖国愛のこれが一種の変容であらうか」（振子）

とある。

戦争とともにあらん限りの組織、機関を通じて叫びわめかれてゐるいはゆる愛国心は、もとより彼には遠い感情である。その美しい言葉が、本質的にはどういふものに属するかは、学生時代からの閱歴が容易に分析させた。官製のこれらの熱情と、真に国土を対象にする愛とを、省三は混合しようとはしなかつたとはいへ、いま頭上の楡の木が、そこに葉をひろげて立つてゐることく、またそれが楡であつて、松でも楊柳でもないことく、日本に生まれたものは日本人であると同じ約束において、祖国愛は宿命である。「振子」

省三において、血と民族と祖国は一体のものだと言つてよいが、身体に生きづくそれが、国家によつて利用されることに怒りの矛先は向いている。したがつて、戦時の心的糾合のために強調された「祖国」の論理とは異なつてゐる。ただし、そうした個別の情動と組織との乖離へのまなざしは、共産党が一人一人の人間を犠牲にすることへの懷疑にも通じるため、省三の延安へ向けての脱出の決意とは、血や民族への共感とも、主義への理解とも異なる論理で行われている。その点では、汎世界的なヒューマニズムと言える。作品内容当時の「ヒューマニズム」が、東洋の解放として、中国への侵略の理由付けに使用されたのとも明確に一線を画していることは強調してもよい。民族の問題については後ほど検討するが、仮に万里子自身の信仰が「血管にはじめからもつてゐた」(「塔のある丘」)ものだとしても、血によつて遺伝するものではなく、その感染は、これまで述べてきたような精神的な位相で起ころのだと言えよう。

### 三. 誰の視点からの歴史か

このような思想を、歴史というバリエーションとして反復するのが能という象徴である。江島宗通は、世俗とは一切の関わりを持たず、能だけを慰安としている。彼にとっての能は、「能楽の聖書たる世阿弥の著作は、花伝書をはじめとして、

彼には愛読以上のものであり、信仰の厚いクリスト教徒の身辺に、つねに神聖な書物が見出されるやうに」置かれ（「江島宗通」、あるいは唯一信頼する梅若万三郎が、アナトール・フランスの描いた、聖母マリアに自らの芸をささげる軽業師にたとえられるなど（「江島宗通」、クリスト教の比喩をもつて描かれるのが特徴である）。

何より結末で、自身は疎開もせず東京の空襲による業火と命運を共にすると決めた宗通が、すべてを引き受けて疎開させる万三郎に対し、ノアの方舟を持ち出して生き残ることの意義を説くに至り、何かの伝統が、明確な宗教を持たない日本人にとって、それにかわる精神的な支えになる可能性を示していると云える。万里子のマリア信仰が、独自の支えとなつていたのと対になる形象だと言えらるだろう。

それとともに、もっとも年長の登場人物である宗通は、規則正しく能を舞う生活のくり返しを通して、時間の番人である。そして観能の際には、くり返される演目の少しの違いも記録し追及するが、これは、二・二六事件が起こった際に、井伊直弼暗殺との符合に思いを馳せるような彼の性質と並行してあり、一回性の出来事と大きな法則との関係をみつめ続ける歴史的視座をあらわすものと言えらる。宗通が要職につける身分でありながら、社会と隔絶して引きこもる原因は、祖父である江島近江守（井伊直弼をモデルとする）の、日本を世界に接続しかつ人々を守る決断が、倒幕に利用されたことへの恨みであるため、彼の歴史への興味は、上流階級である自身の位置づけとは裏腹に、敗者の歴史への同感である。能への親しみは、それが「徳川幕府の権威で保護され」たからであり（「江島宗通」、世阿弥の保護者としての足利尊氏・義満にも共感を寄せ、水戸学派を退ける）。

歴史書に関心を持ち、ギボンの「ローマ衰亡史」をも読む江島は（「歴史」、世阿弥の能について、「あれらを書いて舞つたのは世阿弥でも、彼に書かして舞はせたのはもろもろの日本人だからね。そこが頼もしい」（「方舟のひと」と述べている。小説が省三に焦点化する部分では、彼らの隊に、戦意を殺ぐためにゲリラが流す日本民謡のレコードが聞こえてくる。それが「種族を等しうして生きる者の、いはば血のリズムなる民謡」、「聞くには耳はいらない。歌はおのおのの血管と一緒に震え、同じ五線紙の諧調音のやうにともに連れあつてひびく」（「脱走」と言われているが、能がいまや崇高だとして

も、これと通じるものがあるということだろう。キリスト教を信じる民族の「血」が、万里子によって物理的に伝えられることが信仰の不可欠な条件ではなく、伝統の尊重が、確固たる宗教にも比肩されるよりどころになるといふことである。これは、国民文学論争の中でこそ、民族、しかも庶民が持ち伝えた古典の発掘と、文学史への位置づけが盛んになったこととも歩調を合わせていると言える。

省三についてもまた、ヒューマニズムが、歴史認識と結びついていることは言うまでもない。自立の強い意志がないことで、『迷路』を論じる研究者から多くの非難を受けてきた省三の職業観だが、彼の活動は、搾取を、せめて文化への転化とすべく、増井から資金を引き出し、「由木」の図書館をキリシタン大名時代の資料に特化した特色あるものにしたという奔走である。そうした中で、かつて自分の興味ではなく、生活のためにした阿藤家での古文書の整理を、「別な形態で生かすことをも思ひついでいた。古文書に基いて書かされた藩史は、従来の日本歴史が、権威者の治績、戦勝、名譽、栄達の叙事詩の一種であつたと同じ意味で、(中略)上から見おろした出来事の羅列に過ぎなかつた」と考え、百姓一揆や、課税の具体例など、農民、町民への圧政を余さず書く社会史を構想する(「伯父」)。物語の最後に宗通が、ふと省三のことを口にするのは、彼の認識のレベルというよりは、物語のレベルで、二人の照応を示すものであろう。

一方、人付き合いをしない宗通には珍しく、阿藤三保子を最後まで気に入っているが、三保子の表情は、「能のテクニクで「曇る」といつた角度で、灯を横にほんのわづか傾くと、今までの輝きが忽ち消え去り、翳になつた半面から、小さい襖のやうにふくらんだ下唇と顎にかけて、哀愁に似たものが漂うた」など、能面にたとえられる(「軽井沢」)。周囲からは非の打ちどころのない奥様と見られている三保子の、肉欲のためには空襲すら避けず、自らの身を焼き尽くさないではおかないほどの空虚さの徹底ぶりは、物語の最後まで残る宗通の重さにも並ぶのだと言える。宗通が、結末の万三郎疎開のシーンで、能が多く老女を描いていることに改めて驚いてみせる通り、伝統や歴史とは、連綿と続く女性たちの営みを包含するものであるわけである。ただしもちろん、宗通に長く使えたとみに、彼と共に生きる安寧が訪れるのと、空虚な三保子が対照的に置かれるように、能は、それを生きる人間の、人への思いの深さによって、信仰と化すこともあり、ただの面や

装束の継承に墮すこともあるということなのだ。

#### 四、過去の捉えなおしと〈女性〉

『迷路』の構図を確認してきたが、こうした基礎的なことが、研究の当初にも現れていないのはどういうわけだろうか。これほどの長編であれば、ある程度の整理をしてみせる研究の通例に照らして、文学的リテラシーがあれば誰でもわかるという理由は、不自然である。言うまでもなく、『迷路』が受容される際の特定の文脈に理由があるだろう。『迷路』評価の方向性を決めたとつである荒正人の対談「『迷路』を終つて」（『世界』一九五六年一二月）をみてみよう。省三にとつてのマルクス主義が精神運動であつたという『迷路』の記述について、次のように質問している。

荒 精神運動という意味については、キリスト教とか人道主義につながる知識人の歴史のなかでの精神運動という意味でしょうか。それともまた、当時は革命運動であつたが、今日から見れば客観的には精神運動であつた。つまり主観的にはともかく、どうも底の浅いものであつた、という批判の意味も少しこめたものでしょうか。

同時に、荒は「ああいう長いものをおまとめになるのに、たとえば、夏目漱石の小説などを意識なさつたことはありませんか」とも述べている。周知のとおり戦後には、軍国主義の否定という動機から、日本の近代を、西洋との比較において、封建制が残存し、社会性の欠如した、言わば〈歪んだもの〉と捉える言説が席卷した。文学に関して言えば、日本の文学が、西洋近代小説が本来持つ、作中人物と作者との距離や、構成意識を喪失し、〈歪んだ〉私小説を生み出してしまい、それが継続中であるという認識を示した中村光夫『風俗小説論』（一九五〇年、河出書房）をはじめ、一つの傾向を示した。

荒の拠る『近代文学』も、これに先駆けて、日本が前近代性を克服し、近代的自我を確立することを求めた。そうした立場から漱石論も著した荒は、漱石に縁づけることで、もちろん彌生子の古さを言い募っているわけではなく、近代の再評価

として『迷路』を評価したものである。荒の〈近代文学〉への志向が、左派内部での批判的立場でもあったことが、先ほどの引用での二択の問いになったことが窺われる。

作中の省三が、「このことは、ヨーロッパがギリシャ時代のデモクラシー、中世のあんたんたる宗教的苦悶、その解放としての合理主義を経て、おもむろに近代を迎えたにひきかへ、日本では、記紀万葉の牧歌精神が一度も止揚されることなく、それが仏教の厭世観で、時とともに繊細に糺めされ、そのまま素朴な封建思想と融合したのに起因する」(「塔のある丘」)と語る近代観は、〈歪んだ〉日本の近代像によく似る。だが、対談では荒は、〈歪んだ〉日本から抜け出るヒントを持つ万里子には全く触れず、主人公である省三の他には、宗通をクローズアップするだけである。述べてきたような形での作品構造が確認されずに来たのは、こうした捉え方の積み重ねによる。例えば荒の場合、漱石から大正教養主義のヒューマニズムの見直しにも触れながら、万里子を排除するのはなぜなのだろうか。

『迷路』の長い連載も終盤になる時期にはすでに、荒らに対する「近代主義」という批判が出ていた。『近代文学』は、述べた通りもともと左派であったから、批判は共産党周辺から、『近代文学』派が近代の未成熟を言うことで、日本の資本主義の成長までも見落としてしまう点に向けられたわけだが、それだけではない。「近代主義」とは、文学が政治に従属することに強い批判を表明した竹内好が多く使用した用語である。竹内は、中国文学者の立場から、真正の近代を志向するときに使われた西洋―日本の関係性が取り落すものとして、非西洋的近代をくり返し論じた。

冒頭で述べたように、『迷路』が掲載された『世界』は、アジアとの関係性を模索しており、竹内好の論考も多く載せている。『迷路』自体が、土着的な民族性や伝統を描きながら、その実質的な達成は西洋文化とも比肩できると述べる点で、こうした荒や竹内のような論者の引き合いの中で方向を定めようと揺れる『世界』の影響をまともに蒙っている。このような民族性の問題化を大きく背後に控えて、『迷路』を評価しようとするれば、キリスト教や西洋中心主義ともみられる万里子よりは、同じ信念を日本の土着性として述べる宗通が話題として選択されることもあるだろう。<sup>11</sup>

ただし、荒の立場としては、万里子や女性登場人物の無視について、『迷路』が過去の歴史を扱った作品であることも理

由として考えてよいだろう。先ほどから述べているように、周囲には、戦争の清算に関わって新しい文学史が頻出していった。また、連載時期から言って、『迷路』に直接の影響を与えたとは考えないし、また立場も異なるものだが、岩波新書の『昭和史』をめぐる、亀井勝一郎と遠山茂樹の間で、昭和史の捉え方をめぐり、歴史の「実証」性が争われた論争があったことも、同時代の関心のありかは示す。佐藤泉によれば、「この時期の文学史は、そのため過去の文学に関する実証的な確定記述であると同時に、主体性の再構築へ向けた実践的要請だった」といい、その「レトリックはそもそものはじめから実証的な厳密さとは無縁のところ立論されている」という。<sup>13</sup>つまり、文学史の客観記述というよりは、過分に、過去を納得するための理屈づけや、今後の方針を定める解釈行為が期待されていたということである。

前掲の対談では荒が、原爆を経験し、水爆実験を経た後では、『迷路』の能の称揚のように、文化を恃むだけでは不安であると述べた後に、次のような食い違いを見せている。

野上 あれは水爆以前のできごとなのよ。

荒 だが、お書きになられたのは原水爆のあとでしょう。(中略)

荒 十九年(昭和十九年―小平注)のお気持ちになつてお書きになつたでしょうけれども、お書きになつてゐるのは戦後ですから自然に批判的な態度が出てくるのではないかと思ひましたけれども。

荒はまさに、現在の状況に対する立場の表明を、過去の歴史を通して行うように示唆していると言える。それに対して、彌生子の方は、もちろん作家の意図と小説自体が、必ずしも完全に一致するとは限らないとはいへ、『迷路』においての過去の出来事は、虚構の特権を十全に生かした再創造なわけではないと述べている。宗通や省三によって〈歴史〉の捉えなoshiの必要性が述べられるが、それは『迷路』という小説自体がそれであると自己言及しているというよりは、作中の彼らが実証性を追求し、なおかつその試みが未完遂であるところに、小説が歴史を創造してしまうことへの困難と禁欲を示したと

言えるだろう。

このことと、反省的に日本の近代を語る文脈の中に、女性の形象がよく顔を出すことを関わらせれば、『迷路』の特定部分の不可視化の意味が、いくぶん明らかになると思われる。さかのぼるが、平野謙は、上記のような日本の〈歪んだ〉自然主義的なまなざしを「女房的」と述べていた（『女房文学論』『文藝』一九四七年四月）。この平野の「女房的文学論」には、早くに藪禎子が、「女房的」文学論と「女房的文学」論が同居していることを指摘している。<sup>14</sup> すなわち、〈女〉の視点から新たな作品評価と文学史的展望を提示することと、近代文学の〈女性的〉性質を批判の意図であげつらうことであり、前者の可能性は、平野の女性像の限界によって、後者にとどまるとされる。

藪の言う限界とは、捉えられた女性が、「みずからの意志をもたない、弱者としての女である。女の側の選択の可能性など、ここでは全く考えられていない。女とは、自立の場をもたない、哀れな存在でしかない」ということである。弱々しい、というのとはやや異なる。「彼女らの前にはつねにままならぬ憂き世の現在性があるだけで、過去もなければ未来もない。歴史や伝統は彼女らのあずかり知らぬところ」（『女房的文学論』）という、実直だがそれゆえに凡俗な哀れさである。だが、そもそも、佐藤泉が言うように、「封建的な制度のもとで主体性を確立できなかった」女性像とは、戦争の責任を軍部と独占資本に預け、国民の責任を「無力であった者の責任」として、日本男性を免罪するために、彼らの象徴となるべく要請されたものだとする<sup>15</sup>と、藪が見たいと思っている主体的な女性による見直しはそこにはなく、「女房的」文学論は、「女房的文学」論になるしかなかったとも言える。

だから、平野の「女房」文学論Ⅱ「女房文学」論の女房たちは、ネガティブであるばかりではなく、国民文学論の文脈において、これからの新しい〈庶民〉の文学に期待されるものにも通じるのは見やすいところだろう。この時期、国民文学論では、これまでの文学が、文壇という狭い一部で起こったものでしかなかったことへの批判がなされ、新たな国民にふさわしい庶民の文学が、無着成恭のやまびこ学校やサークル運動で注目されているからである。<sup>16</sup> つまり、庶民の表象は、過去を捉えなおす際に見出されなければならないものであると同時に、だからこそ今後の実現可能な見直しとして、まなざしの方

向の新旧にかかわらず、両局面で機能するものなのである。このとき、藪が望んだ意味での「女房」的文学の方は、理念としてはあるが、実体としての女性を当てはめては語ることの出来ないものとして、夢想されるしかない。

これをふまえて『迷路』への同時代の言及に戻ってみるならば、上流階級の女性たち、特に万里子がごとごとく無視されているのは、庶民に目を向けるべきであるというまっとうな批判であるが、同時に、（みずからの意志を持つ）女性たちが存在（した）、という『迷路』の宣言の無視にも通じる。しかも、述べてきた希望的な文学史の捉えなおしが、特定の女性の形象を必要としたことと併せて考えるとき、この小説が、戦後の状況の反映ではなく、当時の状況を忠実に捉えたとの立場をとるほど、存在してしまふ、女性の近代は、目障りなものになるはずだ。野上彌生子という長命な作家の身体がそこに実在を与えれば、なおさらであろう。

この小説に虚構がないことを述べているわけではないのは、美観的な構想を確認してきたことでもわかるだろう。戦後の文学状況の中で価値を持つとすれば、『迷路』のリアリズムは、実際にあったことを写す私小説的リアリズムではなく、リアリティを持つ典型を作りだすそれではないからである。また、実際に、（みずからの意志）は上流の女性だけにある、庶民女性にはなかった、ということでもない。ただ、庶民女性を主役にしないこの小説は、期待される（書き直し）を装うことはできないということだ。<sup>17</sup>省三の「いくじなし」が、日本人全体の問題として引き合いに出される際には（前掲、野上と荒の対談）、万里子のような女性は扱いはない。こうした事情に伴う女性たちの排除が、単なる女性嫌いではなく、一応は思想上の立場の選択であるようにみえるところに、問題の不可視化と排除の自然化が起こるのだろう。

## おわりに

おそらく彌生子は、下層階級の女性をもつとりあげ、その意志や社会性を示すべきであったろう。また、女性の愛や性欲を追究するにしても、婚姻に回収されないありかたも選べたはずであり、西洋中心的な思考は批判されるべきであろう。他にはない広い目配りをした作品でありながら、秩序を組み替えるという観点からは、評価できる文学作品とは言い難い。

それには全面的に同意する。ただし、それは、重要なテーマの半分を女性が負うこの作品について、微妙なやり過ごしの力学を問わずに済ましてよい理由にはならない。彌生子がオールド・リベラリストとされ、『迷路』の一部が時流にそぐわないとして無視されてきたことは、女性の言動を受けつけないことの言い訳として機能している面もあるからである。『迷路』の批判すべきところはどこなのかは、この作品を同時代に開く作業の後で見出されるのでなければならぬと考える。

注

- 1 『迷路』の引用は、『野上彌生子全集』第九卷（一九八一年）、第十卷（一九八一年）、第一二卷（一九八一年）、岩波書店による。
  - 2 「軽井沢」でふれられる相沢事件が一九三五年であることから推測した。
  - 3 佐藤都「日本の総合雑誌三誌の数量・内容分析からみる日本人の中国に対する関心の変遷」（『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』二〇一二年三月）。
  - 4 竹内洋『革新幻想の戦後史』（二〇一二年、中央公論新社）。佐藤卓己「『世界』——戦後平和主義のメトリル原器」（竹内洋編『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』二〇一四年、創元社）。
  - 5 小森陽一「歴史社会学派」に関する、歴史社会学の覚え書（『社会文学』一九九三年七月）、島村輝「浮沈する「国民」と「文学」——「国民文学論争」という問題系」（『文学』二〇〇四年一月）などを参照した。
  - 6 「仮りにあんたがいつしよに乗つてゐて、いつしよに落つこつたにしても、あんたを呼びはしなかつたわ。それ、信じられる。」／「信ずるとも。」／「——」
  - 7 「せめて生きてゐるあひだに、愛するつてこと、どんなことか知れたかつたわ。」／「君は知つたわけだよ。」／「さうかしら。（中略）私、なになの、なんだつたの。何のために生まれて来たの。」（『墜落』）
  - 8 アナトール・フランス「聖母と軽業師」。
- 甘粕石介「近代主義の主体性論」（『前衛』一九四八年八月）。

9 島村輝、前掲書。また内藤由直『国民文学のストラテジー プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』（二〇一四年、双文社出版）に詳しい。

10 例えばヒューマニズムについては、務台理作「現代の意識とヒューマニズム」（『世界』一九五六年八月）で「日本人が西欧の語調をまねて現代の危機をいうのはおかしいが、しかしアジア自身の危機を知らずにいることは一層のまちがい」と述べている。『世界』の記事との関連性については、紙幅の関係上、別稿に譲る。

11 本稿では詳しく述べられないが、彌生子の民族や伝統の捉え方については、『迷路』執筆当時講義を受けていた田辺元の影響も考えなくてはならない。周知のとおり田辺元は、彼の「種の論理」という考え方が、戦争支持として若者への影響力も持ったことについて、戦後に反省し、キリスト教を媒介にこの論理を修整していた。

12 亀井勝一郎「現代歴史家への疑問 歴史家に「総合的」能力を要求することは果して無理だろうか」（『文藝春秋』一九五六年三月）、遠山茂樹「現代史研究の問題点 『昭和史』の批判に関連して」（『中央公論』一九五六年六月）。

13 佐藤泉「戦後批評のメタヒストリー 近代を記憶する場」（二〇〇五年、岩波書店）。

14 藪禎子「『女房的文学文学論』私見」（『日本文学』一九九二年一月）。

15 佐藤泉、前掲書。

16 竹内好「社会と文学」（『文学』一九五四年三月）。

17 平野謙は、『迷路』自体については、やや異なる見解を示している。せつものさらなる書き込みを要望する一方、万里子について、「わたくしあの娘さんが好きなんです。わたくしだけでなくて、あの小説を読む人はみんな好きになるだろうと思います。」とふれている（野上彌生子・平野謙「対談・最近作研究 歴史的现实と創造——『迷路』をめぐる」、『文藝』一九五七年三月）。ここの評価のポイントは、無口であった万里子の自我が、徐々に明確になっていくことである。発表からだいぶ時間も経っているが「女房的文学論」に関連付けるならば、「女房的」文学として『迷路』を捉えているとも考えられ、『迷路』の歴史性に関して、荒とは異なる解釈をしているとも考えられる。